

Title	英領ソロモン諸島調査概報
Sub Title	Preliminary reports of the archaeological and ethnological survey on the British Solomons : general introduction
Author	伊藤, 清司(Ito, Seizi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1965
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.2 (1965. 10) ,p.109(263)- 122(276)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	調査報告
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19651000-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の集会所に代るもので、外来者の宿泊にも充てられている。

まず部落北方約三百米、Lungapeki の谷川を遡ること約千米の溪谷に在る女人禁制の地たりし Lungapeki を調査した。谷川の中にある長さ八十糎、巾六十糎の頁岩の塊がこの聖地の中心で、未婚の若者がこの“Tanbuna”にこもり、この石塊を砥石として車輪型貝貨(大小により Bakeya, Poata などの称呼)を作成。これを携えて部落に現われ、結婚の折 bride-prise として女の伯父などに贈る風が存した。尚、Lungapeki は Ganonga 語で小さい Lunga (地名) という意味で、この島の南端に big Lunga 即ち Lunga wata なる同様の聖地ありというが、かような貝貨の作成は西北ソロモンのいづれの島、いづれの部落の若者も行うものとは限らず、貝貨も亦物々交換の対象とされたものという。

現在の Vori 部落は、彎曲する海岸に沿い带状をなす人口約四百の比較的新しい大規模な部落で、全村 Seventh Day Adventist Mission の教化に浴している。到着した二十八日がたま／＼その日に当っていたが、金曜夕刻から二十四時間を安息日とする戒律を厳守し、調査の協力すら敢えてしない徹底振りであり、恰もそれが taboo の如く、些かの労働をし、あるいはキリスト教以外のことを口にするをはゞかる有様。

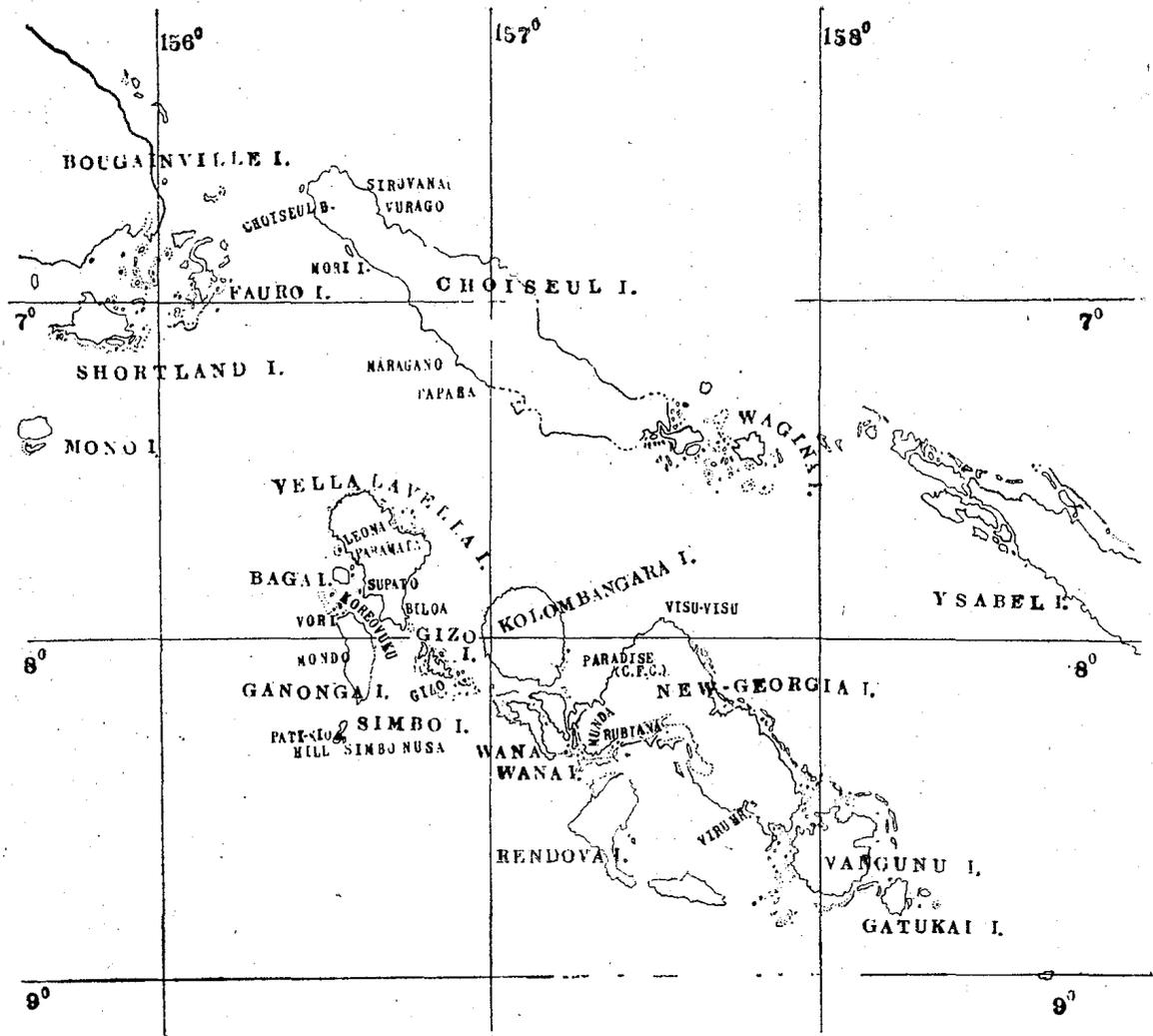
尚、ソロモンに活動中の missions は Roman Catholic, Melanesian (Anglican), South Sea Evangelical など数派に達するが、西部ソロモンでは上記 Seventh Day のほか、Methodist が最も盛んで、最近に至り C.F.C と略称される新興宗派(後述)

が振いつゝある。

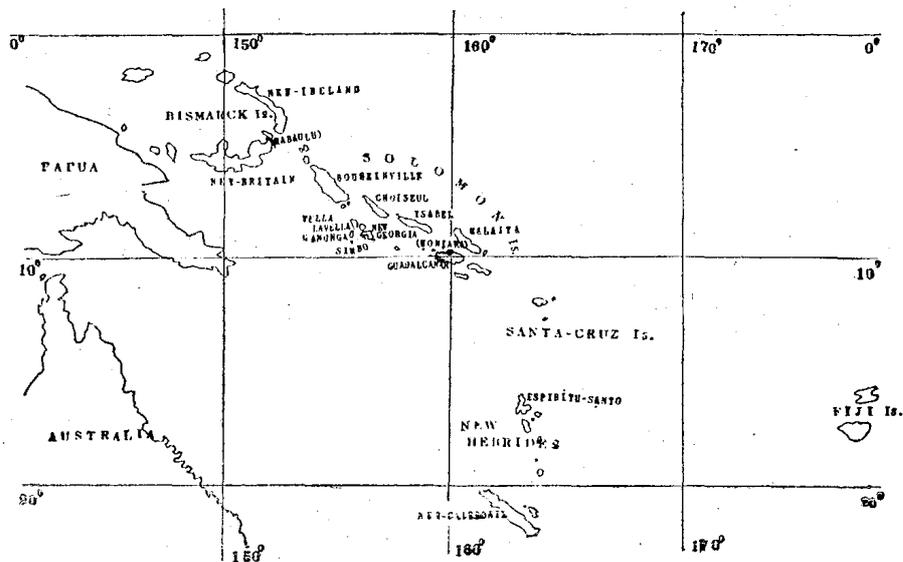
二十九日、mission school の dormitory のある Buri 経由で、山間を貫け東海岸の Koreovuku に向つても、Buri にて引き返す。途中起伏多く、往復に時間的余裕なきためであるが、途次の山腹に作出り小屋を伴う焼畑多く、部落民の生活のための空間の比較的遠隔なることが注目された。夜、古老より聞きとり。彼らの語る“old history”は概ね当地における mission の開拓布教史であり、同様の経験を他の地でも味った。mission 到来以前の固有文化は、習俗・制度であると物質文化であるを問わず、一般に“old customs”の語で呼ばれ、今日この“old customs”の語は意識的に口の端にのぼせるをはゞかる傾向がつよ。

尚、原住民の使用言語はいわゆる Melanesia 語に属するが、その方言化が甚しく、しかもこの間に介在して Non-Melanesian が分布し、亦 Indonesian 系語彙も少なからず含まれてゐることは、Ray, S.H. その他の学者によつて指摘されている。しかし、英語が mission school の教師などによつて語られるほか、土着化した Pidgin English が西北ソロモンでも比較的広範囲に通用されている。

三十日、Vori 部落南方約十軒の Mondo (Ganonga) へ移動。Vori の head man が old customs の調査に協力、自ら案内を買つて出たのであるが、実は彼ら Vori 部落民は Mondo よりの移住民で、この部落こそ彼らの父祖の地であり、head man の Nigusasa (70才) 自身もこゝで出生しており、彼の兄弟が Mondo の head man でもある。現在の Mondo 部落は海岸台地上に散



英領西部ソロモン要図



ソロモン諸島略図



Ganonga 島 Vori 部落にて

その他が遺存していた。午后、部落の南郊を流れる Kelekele 川の流域および海岸に屹立する山頂近い急斜面 Ghoreghoto に立つ skull house の群を調査。Mondo 流域の skull house が自然の巨石を利用しているに對し、後者では支柱付木製棺状のものが目立ち、共に “tanbuna” などの名で呼ばれているが、兩者の成立の時間的前後関係、階級性の有無、その他の相異点は明白になし得なかつた。尚、一九五四・五年にこの地方を襲つた比較的激しい地震のため、木製の skull house の崩壊・腐朽が目立つたが、それらの中にはトーテムを表現すると思われる鰐の彩色・彫刻の施された側壁をもつもの（蒐集）など種々あり。実測・精査。

夜、推定九十才、自称百才以上の Koito 老人を含む部落の古老を集めて聞きとり。概ね三・四十才以上の中老年人の年令は不確実で、missionary の到来時期が年令計算の目安となつている。因みに西部ソロモンで最も早く伝道活動の開始されたのは New-Georgia 島の Munda 地方で、今世紀の初頭。他の地域乃至島嶼ではそれより数年から二十年程おくれで mission が接触している。

三十一日、伊藤は Koito 夫妻を訪ね、昨夜来の聴取の継続。同翁は mission 到来後間もなく盲目となり、伝統文化の思い出に生きており、head hunting などの経験をもつ人である。近森・高橋は精査のため Mondo 川流域の stone circle, skull house へ。

在しているが、旧村 Mondo (Manumanughu) は Mondo (Pate-be) 川の中流域にあり、ここには多数の頭蓋骨を伴う skull house

午後、Vori 部落へもどり、Baga よりの迎へのランチを待つ。この間、カヌーを駆つて Vori 沖に浮ぶ “tanbuna” の小島に上

陸。海岸にそゞり立つ岩壁が、土民の信仰の対象とされ、近くを舟行することすら taboo とされていたもの。尚、やゝ離れていわゆる「駆け込み島」あり。迎えのランチ出現せず、head man のカーにて、夜間航行。Baga くもゆる。

九月一日、再び Forestry Dep. の好意で Gizo より廻送された Tenenba 号にて Gizo 島へ渡る。rest house に荷をおろした Choiseul 島ゆきの便船を待つ。

二日、在ソロモン四十年の英人 Palmer 翁を案内人とする。概ね二カ月に一航の不定期便で、帰島その他所用の土民たち数十名をのせて廻る Gizo District Commissioner 所属の巡航船に便乗、Choiseul 島に向う。夕刻 Maragano 部落にて下船。

三日、思いがけぬ選挙風景に遭遇。本日は六年前に布告されたソロモン初の統一選挙日に当たっていたのである。出発前 Worsley, P. の Melanesia における "Cargo Cults" の研究などで、南太平洋各地に新しい政治的 movement のあることは承知していた。ソロモンに於ても、とくに太平洋戦争後、"Marching Rule" の名の下に、一部島民の間に経済的要求と並び、自治獲得運動がとなえられつつあるが、今回の統一選挙は原住民の自覚と行政参画への要望に巧みに応じた英政府の施策であるが、現状は大多数の土民の啓蒙度を示すような優暢とも滑稽ともいえる選挙風景であった。概ね部落単位で選出された councillor 中から、更に互選された議員十四名が Honiara で chief council を構成し、植民地政府の諮問にあづかるもの。Maragano には、もう Honiara 駐在の警察官(土

着民)が Gizo では白人 trader がそれ／＼新議員に当選している。午后、部落後背地である山腹舌状台地上の遺跡を調査。skull house は土盛の上に石積したもので、head man の語る祭祀様式などと共に、Ganonga のそれらとの相異が目立つ。副葬品として貝貨のほか土器あり。

夜、部落あげての歓迎の踊りが、部落の広場でくりひろげられた。楯(=bako) killig stick (=manza) などをもち、パンパイプ(=kiu)などの楽器を奏し、深夜までいわゆる "native dance" が続く。西北ソロモンにおいてもポリネシアの影響著しく、音楽・舞踊にも中部ポリネシア風が目立つ。とくに若年層に流行の傾向がある。これに対し伝統的な慣習様式は "old" 乃至 "native" の形容詞を冠して呼びならわされ、上述の通り否定的なニューアンスを伴うことはここでも同様。

四日、部落南方の Pikia mora 岬上の Nugol 遺跡調査。午后、われ／＼の要望に応じて、部落民は再び native dance を演ず。祖先祭・葬儀・首狩り出陣・祝賀のたびに踊ってきたその全レパートリーを披露。(これを十六ミリに撮影)この間、近森・高橋は部落周辺の遺跡調査を継続。夜、土民は big kaikai (大祝宴)を催うし、徹宵で踊り歌う。

五日、秘伝とされる pandipe 作りを見学。この技術を伝える老人の呪術的な作法・技法が注意をひいた。

チャーター船 Vatakadu (十噸)にて南方十数軒の海岸部落 Pa-para へ向う。はじめこの部落は hedon (heathen) の集落とき

き、半信半疑で上陸したが、既に Methodist の宣教下にあり。たゞし、近年山間より居を移したという hedon の老人が住んでいた。推定九十才とみえるが、勿論客観的根拠なし。その後の調査では、西北ソロモンに関する限り、hedon 部落は現存しないことが判明したが、概ね八十才以上の年令層は mission の教化に染らず。そのような hedon は部落ごと一・二名生存し、同居している。

「約六十才」の Methodist と自称する眼光の鋭い男 Pirokona を、酋長が matezana (巫医) の子と紹介。巫師の家系・巫術およびその伝授などいっき語る。この matezana と head man のみは、その死に当つて、風葬によらず、火葬にふするなど、他の部落民と異つた社会的待遇をうけて来た。夜、沖に浮ぶ Vatakadu の船内に重なりあつて就寝。

六日、再上陸し、hedon の老人等より聴き取り継続。Methodist と自称していた matezana の子 Pirokona が病氣占いのため自から神霊を招き、ecstasy に入り、神託を告げる。(十六ミリおよびテープにおさめる) かゝる土着宗教は部落民の信を失いつゝあるが、今尚、matezana の盛る秘薬を白人医師の医術よりも有効と認めて服用する習俗は跡を絶つてない。尚、この島の北端に今日、魔術によりて十名に余る土民を殺害し、部落民に忌み怖れられている老 witch doctress が住むというニュースあり。然もその附近にこの島唯一の土器作り部落あり、との情報を入手。予定を変更し、北上す。途中、Mori 島付近で、衣類などの雑貨を行商中の華僑のランチに遭遇す。その後、一両度ならず同じような経験をした

が、彼らは物交によつて土民からコプラなどを集貨。その精力的な活躍は、白人商人などから、必ずしも歓迎されていない。尚、一九五九年の census では、英領ソロモンにおける中国人口は三百六十六人、六四年現在では約四百人に達している。

夜、雨中の Choiseul 湾に投錨。大戦中、日本陸軍の前線基地があり、且つ激戦地の一つ。

七日、雨中を進み、島の北端を迂回、正午 Sirovana 湾に投錨。この僻地で伝道にたずさわるニュージールランド国籍で、元兵士の宣教師の歓待をうける。

湾に注ぐ Pazu 河畔の canoe house で、首狩り時の fighting canoe を見る。最大のは全長十余米。共に約二米のそり上りの舳・艫をもついわゆるゴンドラ式で、軍艦鳥などの彫刻あり。舳の波切部には航海の安全と戦勝の祈りをこめた木彫神像 Ugogozu あり。

土器作り部落といわれる Pazu 河畔台上の Sengalomboro 族の部落を訪ねる。土器作成の技術は、僅かに一軒、Tanataru の家に「秘伝」の形で伝えられていた。たゞしその技法は幾枚かのメンコ状の粘土板を丸石と板片で叩きながら接続して作り上げるごく幼稚なもので、粘土採集地と共に同家の中で母娘相伝されている興味深いケースが見られた。この土器は Choiseul 島一円の部落へ供給されてきており、その入手には貝貨による物々交換の形がとられてきた。

八日、奥地の Zalebesei に住む噂の Witch doctress Reko-

vavene (80才前後)は、われくの到着を予知してか、逸早くジャングル深く姿を消す。宣教師 Laughnan 氏の案内を得て、Vatakadu 号で東南約三十分、それより徒歩一時間。Vurango 部落の後背地 Sirebanga のジャングル内に遺された浸蝕洞遺跡を調査。精霊の浴池と伝えられる泉に浴う浸蝕崖の壁面に、精霊を表現すると思われる彫刻あり。且つて H. A. Bernatzik がこの島を訪ねた折発見した同種の石彫と類似した像だが、それと異なる点は、今回発見の石彫は陰刻像で、波状の頭髮。は恰もオーストラリア・アボリジンの画くワンジーナの像のそれに似た放射線状をなす。夜、近森は土器作りの家へき取り精査。伊藤・高橋は部落民の歌う“native song”を採録。

九日、付近に他の調査対象が一・二あつたが、やゝ遠距離にあり、且つ Choiseul 滞在が予定以上に長期日に及んだため、断念。帰路につく。再び往路に沿ひ Papara まで南下、それより徹宵で西へ進路をとり、Vella Lavella 北端に向つて大洋を横切る。途中船の針路を誤り、ために遅れて十日午后、Baga 着。五日以来、ゆれ動く狭い船の上で、しかも雨や波しぶきをあびて重なりあつて寝てきたため、全員疲労激し。十一日は整理、休養。

十二日、伊藤・近森・高橋・服部は Baga 島の対岸に当る Vella Lavella 島西海岸 Paramata 部落へ。head man の Silas の案内を得、カヌーで部落南方に当る Lunga 及び Kilebembala 岬へ渡る。こゝには、Silas の出自たる Reresare 族の sopé が所在する。共に自然の巨石に加工し skull を安置したもので、Lunga

のものには浮彫の神像やカヌーの図あり。氏族とその sopé との関係・複葬の習俗・祖先祭・豊穰祭の一斑をしる。精査を他日に期す。

十三日、一行五名は、案内の Palmer 翁を伴ひ、Vatakadu 号にて Ganonga 島南方の小島 Simbo へ渡る。当地の missionary 夫妻 (Fijian) の好意で Rengana 部落の rest house に投宿。十四日、Panaghunda 岬の skull house (= era) 群と木彫神 Beku を調査。A. M. Hocart 及び W. H. R. Rivers の来島せし一九〇八年当時のものが、殆んど変らずに遺されている。Narovo 湾を挟んで Panaghunda 岬と相對する Masulu 部落で、部落民の演じる initiation ceremony とある bonito fishing を見る。厳格な taboo のもとで、数か月に及ぶ山籠りのあと、海辺に姿をあらわし、かつを釣り、はじめて女性に触れることが許されるというこの成人式は、ソロモンに広く行われてきた古俗である。

十五日、島の中央に聳える taboo の丘 Patu-kio (標高三百米) 頂上に登る。西北ソロモン諸島民の間には、死者の靈魂がこの山頂にある火山口 Keru に飛来し、その岩壁に自己の mark を印し、やがて西北遙かの死者の国 Sonto へ赴くという他界信仰が広範囲にゆきわたつている。高橋が蔓製の速成ロープで火口へおりたが、底深く調査不能なるも、火山口の周辺と共に人跡等認め難し。帰路、同山の東麓にある Bulolo 部落を探訪。

午后、属島の Simbo nusa へ渡る。Eddy stone の名で呼ばれてきた今日の Simbo 島(土語では Mandegusu)の称呼は、



Choiseul 島 Maragano 部落民の「首狩り出陣」の踊り

たといこの属島は、狭い海峡により Simbo 島の東南に接している。流星の信仰を伴う石積みみの “tanbuna” や bonito fishing の折の信仰の対象とされる海に面して樹つ木神像 Nekele などあり。

西部ソロモンにおいて活動中の mission 諸宗派については上述の通りだが、概ね血族集団から構成されてきた部落民は、今日、部落単位で一つの教派に所属しているのが普通である。偶々他宗派の信者が部落中に生じると、部落をあげて悉く新宗派に転宗するか、さもなければ、彼らは分れて新村を構成する例が見出された。現在八部落から成る Simbo (native name じあね Mandegusu は四つの部落の意)には七旺会と Methodist の二派が伝道されているが、近年西北ソロモンの新興宗教である C. F. C. の教徒が、太平洋戦争中 Shortland で日本軍に使役されていた男を中心に、Simbo nusa で一部落を建設している。

夜、われ／＼を歓迎し、島民の bamboo 音楽が披露される。Polynesia の影響の著しいのは、伝道師が Fijian である許りではなさそうである。

十六日、近森・高橋は Panaghunda 岬の era 群の実測・精査に当る。伊藤は Regano および Masulu 部落で、古老らより聴き取り。竹中誕生譚その他の説話などを採録。その後、島北部の Menge 部落を訪ねる。

西北ソロモンの部落は概ね大は三・四百人、小は二・三十人の住民から構成されているが、Menge は戸数五、人口三十前後の最も小

元来この属島の名によつたもの。Eddy stone と背くらべをして負けた隣島 Ganonga の神が、嫉妬して投げた石のため欠けて出来

規模の集落である。この部落も例外ではないが、総じていづれの部落も想像以上に清潔であるが、生活用具は屋の内外を問わず什器その他殆ど少い。主食はタロ芋、ヤム芋、白人接触以後の渡来品といわれるさつま薯。嗜好としてキンマ噛みの俗あり。キリスト教の浸透により、古俗の著しい退潮に拘らず、彼らの経済生活は基本的には殆んど変化なし。

十七日、伊藤・近森は Menge 部落へ。昨日発見した海岸に突出した舌状台地上の“tanbuna”の精査。従来調査した skull house と形式上やゝ異つた平石組みで、副葬品に fighting canoe の波切り部の神像を模した石像など。帰路 Masulu 部落に立寄り、再度聴き取り調査。

午後、Baga より出迎えの会社所有のランチにて帰島。

十八日、調査結果の整理と休息。伊藤は夕刻より Baga 島の北西海岸、俗称 Coral-plain へ。こゝにはソロモン林業(株)の伐採現場あり。東部ソロモンの Malaita 島より数十名の労働者が出稼ぎに来ている。同島は英領ソロモン全域の約半数に達する人口を擁し、この海域第一の労働力供給地となつている。当初の調査計画では、半年毎に人夫あつめにゆく会社のチャーター船に便乗し、八月中旬に Malaita へ渡島。募集期間を利用して、同島の一半を瞥見の予定であつたが、ソロモン到着の遅延などの都合で断念。夜 Malaita 島民を集め同島の習俗などにつき聴取。西部ソロモンのそれらと比較。

十九日、近森・高橋は Vella Lavella にのこられた同島の開

闢伝説に基き、Vella 山へ。Paramata の海岸より約二時間半の後背にある高さ三百米の山頂近くに、且つて白人接触時まで存在した集落群遺址を確認。後日の発掘精査を期す。

二十日、New-Georgia へゆくべし Gizo へ。同島の rest house にて米国 Oregon 大学の大学院学生らと同宿。この研究グループは、人口過剰のため、一九五五年以来移されて Gizo 島などへ集団移住している Gilbert 島民(約五百)の環境適応などの社会人類学的研究のため渡島中とのこと。

二十一・二十二日、チャーター船現われず。ひき続き Gizo 滞在。二十二日午後、Gizo 郊外にある Palmer 翁宅を訪ね、在島四十年間の蒐集になる土俗品のコレクションを拝見し、写真撮影。

概ね十月中旬と連絡をうけ、帰国の折の乗船に予定していた貨物船 Tahiti 丸が、この日突然本月三十日頃 Gizo に入港とのニュースが入る。予じめの立案日程に従い、まず New-Georgia 島の主要地の general survey を終えたのち、本月末より凡そ二週間の予定で特定部落での intensive な調査を計画していたため、この突然のニュースに困惑する。早速 Tahiti の Gizo 入港予定日の確認のため、東京・Honiara 等へ打電。チャーター船はついに現われず。Palmer 翁の奔走で新たに New-Georgia 島 Munda 在住の白人 trader 所有の Liliane 号を契約。New-Georgia 西北端の Visuvisu に向う。因みに同船は十六噸、七ノットの木造の trading-boat での海域中、民間所有の船としては最大のもの。暮色の Visuvisu の入江に投錨。原住民と暮す白人 Page 氏

を訪ね、情報を蒐集、協力を乞う。



Choiseul 島 Sirovana 湾上の戦斗カヌー

Georgia の北海岸を遠く迂回し、徹宵で Roviana へ向う。

この間、伊藤はサンケイ組と共に、まず Visuvisu 部落を探訪。それより C. F. C. 即ち Christian Fellowship Church の本部のある "Paradise" に教祖 Eto Silas 氏を訪問する。しかし教祖は Wana-wana Lagoon へ出張布教中として不在。尚、Eto 教祖は推定年令五十一乃至二才。Methodist の洗礼をうけるまで呪術師であり、早くから卓越した才腕で、土民間に畏怖されていた。

二十三日、Page 氏の

案内で、近森・高橋はポーター五名を伴って Visuvisu 川（上流は Lupa 川）を遡行、西部ソロモンにおける最大の集落址の一つとされる Lupa の遺跡を訪ねるも、日程等の都合で断念。途中にある河道を利用したと思われる湿地性タロ芋の灌漑遺構を発掘調査。二十四日下山。Page 氏の操る船外機の付きカヌーで、本隊に合流すべく New-

太平洋戦争中、アメリカ兵士で、同じ Black skin の黒人兵らと接触。爾来、彼は豊かな物質生活の実在、植民地下の白人対黒人関係以外の社会の厳存を認識し、これを機会に Methodist から離脱。Bible に基づく独特な教義を説き、物心両面における豊かな黒人中心の Paradise の出現を主唱。一九六〇年、C. F. C. と公称。植民地政府の認可を得て、新宗派を興した。はじめ Kolombangara 島に、続いて New-georgia の現在地に本部を建設。一九五八年には篤信者をおつめて都市計画による "Paradise" を完成。四周に柵



Choiseul 島 Maragano にて:「もがりの踊り」

をめぐらした内に、縦横・整然と同規格の四十戸からなる住居を並らべ、柵の外側には同数の Kitchen House を配するという特色ある構成である。共同耕作による収穫物を均分し、余剰は伝道・教育の費に充当するという社会主義的方式に拠っている。この聚落に接して C. F. C. の経営する学校あり。その建物の棟に米軍航空機のそれと同じマークが掲げられているのは印象的であつた。祈禱

には讚美歌に熱狂的な拍手をまじえ、法悦境には全身痙攣と叫喚の physical な激しい動きをも伴う。短時日に原住民間に支持者を獲得。現在西北ソロモンを中心に四、五千人の信者をもち、土民間にこの C. F. C. への転向者が次第に増加しつつあると聞く。

午後 Diamond 海峡を通過。夕陽の輝く Roviana 礁湖に入る。世界最大の Lagoon といわれ、風光明媚。直ちに Munda の Methodist 本部に chair-man を訪ねるも不在。尚、この本部に隣接して C. F. C. 信者の集落あり。C. F. C. の将来に危惧する植民地官吏の言も成程と頷づける。付近は太平洋戦争の激戦地の一つ。舟艇、火器など戦争の残骸未だ多し。

二十四日、伊藤は再び Methodist 本部を訪ね、chair-man の Carter 氏より、この海域における草創期の伝道史をきき、布教上の諸記録の有無・所在および閲覧の便を乞うも、記録は今次大戦で悉く焼失せりと。別に土俗品を収めた陳列室あり。Carter 氏の案内を得て拝見。但し、その数僅か三、四十点。こゝにも戦災のあとを見る思いあり。近森らとの合流予定地点に近い Roviana に移動。

伊藤並びにサンケイ組は Roviana 礁湖の中心と目される小島 Roviana-nusa の中央山上にある祭祀遺址 Botu を調査。高さ幅ともに平均二米、延長三十米に達するコ字型の石積墨域の中央部に Roviana 語で Siku と呼ぶ石彫の犬の首あり。その前に頭蓋骨、シャロ貝などを供う。案内の土人の言によれば、且つて首狩りに当り、Roviana の戦士たちは犠牲を捧げてこの石彫の神犬を祀り、その犬の向いた方位目ざして出陣したともいう。Roviana 土人は

首狩りにたけ、しばしば西北ソロモンの各地(就中 Choiseul および中部ソロモンの Ysabel 島など)を襲い、ために近隣から恐怖されていたという。英植民地政府と Methodist Mission はこゝにこの蛮地に着目。前者は首狩りを厳禁し、fighting canoe をつきづくに破壊焼却するなど、力をもつて治安にあたり、やがて、西部ソロモンの行政府をこの Roviana 礁湖内の一小島におく(大型船舶の出入に備え、戦後、Gizo へ支庁を移転)。後者は一九〇二年以来「首狩族」の教化、慰撫にあたり、本部をこの地に設置し、爾来、大戦までこの地が名実共に西部ソロモンの中心となつた。

二十五日、拂曉近く、徹宵で Visuvisu より急行の近森・高橋らが Roviana 沖で合流。

伊藤は土民の案内にて、Munda 東方約十五料の山中に遺された巨石遺跡を探る。径八、十米の楕円状に並ぶ高さ二米、二十、三十糎の方角の十余本から成る石柱群をジャングル中に発見。地震でやゝ折損・崩壊するも、略々その原形をとどめる。一種の tanbooplate であり、首狩りに際しての集会や head-man らの合議の場とされたとの伝承もあり。

近森・高橋およびサンケイ組は Roviana 礁湖で行われた bonito fishing をみる。

上記帰国乗船予定の Tahiti のソロモン海域入りに関する確実なニュースは已然つかめず。ために、更に南下し Viru-harbour 乃至 New-Georgia 南端の Gatukai 島方面の調査予定を中止し、とりあえず基地 Baga へ引揚げることに決定す。

Munda の rest house に休息中の Harvert 大学の Anthropologist Mr. E. Ogan 君と。D. L. Oliver 博士門下の研究メンバーの一人。Shortland Is. 方面で現地調査中とのこと。

二十六日、Gizo 経由の Baga 島へ。

二十七日、貨物船 Tahiti 丸の到着予定の見込が立たぬため、後半に予定していた intensive な調査に直ちに入るべく、準備を始める。八月末以来 general survey をしてきた諸部落中より、基地との連絡・部落民の協力・部落の規模・問題点の多寡・新旧両部落の比較研究などの点で比較的好条件をもつ Paramata を選定。早速 Vella Lavella 島へ渡す。

近森・高橋はさきに下検分した Paramata 部落の後背地・標高三百米の Veala 山上に遺る現部落の前身集落といわれる住居址群の発掘調査を担当。伊藤は Paramata にどまり、同部落の census などを実施。古老らよりの聴取による現・旧部落間の関連などの調査に当る傍ら、山上発掘班との連絡、物資の補給に当ることにする。まず発掘に備え、ポーター・人夫の手配をする。

午後、伊藤は、北方二軒弱の分村 New-paramata (Leona) 部落へ。近森・高橋は Lunga にある skull house の実測再調査。尚、石川・服部は本隊より分れ、十月一日まで、Ganonga 島の Mondo 部落へ。

二十八日、近森・高橋はポーター多数を伴い Veala 山頂に宿舍を設営の上、集落址発掘開始。伊藤は Paramata および Leona にて field work。午後 Leona 沖に浮ぶ第一次埋葬の小島 Omauva に

渡り踏査。ついで第二次埋葬地の一つである paramata・Leona

両部落間の海岸台地 Rekoveara の丘へ。



Skull-house (Vella Lavella 島)

二十九日・三十日、近森らは、Veala 山頂にとどまり、悪天候下に発掘を継続。二十九日夜、伊藤はラジオ・ニュースでキャッチした Tahiti 丸が明三十日 Honiara 入港予定との情報にもとづき、帰

国手続その他の準備のため、急遽 Baga へ帰島すると共に、Veala 山上の発掘班にその旨通報。近森・高橋は早期完了をめざし、雨中の発掘を強行。Baga 島にて二十九日のラジオ・ニュースは誤報、Tahiti 丸は十月十七日 Baga 入港予定の新しいニュースを得る。十月一日、近森・高



教室風景：New-Georgia 島 Paradise にて

橋は発掘を続行。Veala 山頂及びその梁線上に、大型円形の集会所兼共同炊事場の Paile を中心にした四つの塊状集落群が発見され、ヨーロッパ人との接触時まで続いた固有の集落の実態がほゞ明白にされた。

伊藤は再び Paramata くもどり、部落の head man の Silas を伴い、Veala 山へ。父も亦 head man であつた彼が、山上時代の記憶を現地遺跡に立って語るを聴取。crocodile (= Esoro) をトーテムとし、三人の head man に統轄された母系社会。対峙する Kumboro 山上にも pigeon (= Kurou) をトーテムとする Kumboro 族部落間の関係。当時の Witch doctor (= Rakomo) の社会的地位、その相続など。

二日、近森・高橋は発掘を一応終了下山、整理・休養のため Baga 島へ。サンケイ組も Mondo より Baga へ。

三日・四日、伊藤は引続き Paramata にじじまり、mission school の若い教師の協力を得て、両部落の census など。亦、古老よりトーテムの由来に関する神話その他の伝承と共に、山上部落より、一九四〇年前後に成立した現 Paramata 部落への移居の経緯を聴取。部落民は数年前まで Methodist なるも、head man の Silas が C. F. C. に転宗したため、部落人口の半数を占める Methodist は逐次 Leona に移住し New-Paramata を建設。現在 Paramata の宗派別戸数は全戸十六戸（二三五名）中十戸が C. F. C.。他の六戸の Methodist は部落の東隅の台地付近に塊状をなしてじままつてゐる。尚、現 Paramata 部落は白人との接触

を契機に数次に亘つて居を移しつゝ下山した Veala 族の中、いつ早く白人宣教師の感化をうけて自己の属する氏族の伝道事業に當つた Silas が、同信者を伴つて当時 Leona 北方三軒の海岸にあつた Neativilu (現存せず) より移り建設したものである。

尚、白人との接触に伴い、山間部落が相前後して海岸低地に移つたが、感冒・梅毒などの文明病におかされ、その結果の原住民人口の激減傾向は、西北ソロモンでも共通してみられた現象であつた。しかし現在、mission などの指導下に、衛生環境医療設備が進み、近年に至つて人口が激増しているが、海岸定着後の現部落は山間時代のそれに比し、比較的耕作地が狭く、已然として粗放な焼畑耕作にとどまる現在の経済生活に立つ限り、人口問題はソロモン島民社会構造の再編の内部的誘因とならう。

五日、伊藤、Baga へ。休養、整理。

六日、伊藤・近森・高橋は比較研究のため Paramata 南方十数軒の海岸部落 Supato へ。伊藤・高橋は部落南方四軒の Butubutu sopo 並びに Botoboto sopo へ。従来のもつと異つた木製極状の skull house 数基あり。各種貝製品並びに鱧の頭蓋骨などを供う。

七日、伊藤は部落内での field work。近森・高橋は stone circle などの調査のため北方の Salve へ。crele の中央に、土民が野豚狩りの折の祈禱石あり。尚、伝統的習俗儀礼に不可欠であつた豚の飼育は一九三〇年来、不潔を理由に植民地政府のきびしい取締の対象となり、西部ソロモンでは、今日、殆んど見ることが困難である。

